

国定公園のまち幡豆のブランド化

「景観によるブランディングへのプロローグ」

浅野 健

愛知県幡豆町は、町域の四分の一程度が三河湾国定公園の区域に含まれ、「愛知・三河の原風景」ともいえるべき景観が残っている。幡豆町では、この良さを活かした取り組みが進行中である。

地域ブランド活性化計画の策定

幡豆町は、愛知県南部に位置する面積二十六平方キロメートル、人口約一万三千人のコンパクトな町である。山と海の豊かな自然に恵まれ、愛知こども国、三ヶ根山スカイライン、寺部海水浴場などの観光スポットがあり、年間約八十万人の観光客が訪れる。しかし、人口も観光客も減少傾向にある。幡豆町では、この人口減少と観光客の減少に少しでも歯止めをかけようと、昨年三月に地域ブランド活性化計画を策定した。この計画で、「おだやかな自然・景観」「こだわりの特産品」「ふれあいイベントの開催」を三つの柱として、それぞれの事業展開と推進方策を取りまとめた。

幡豆町ならではのアクション開始

地域ブランド活性化計画で掲げた三つの柱のうち、「特産品」と「ふれあいイベント」については、既にアクションを開始している。「特産品」については、町内で容易に手に入る新鮮な魚介類や農作物を使い、新たな特産品「はずあさりの豆味噌焼き」「はずせん」「はずめし」「はずむす」などを開発している。この他にも、地元の造り酒屋が、地元農家で採れる米を使って、「鳥羽の火祭り」「名古屋城の礎」をつくるなど、幡豆町のPRにつながる新たな銘柄を次々と発表している。

「ふれあいイベント」については、名古屋城本丸御殿復元事業、あるいは二〇一〇年に愛知・名古屋で開催される生物多様性条約第十回締約国会議(COP10)を幡豆町としても好機と捉え、PR事業を開始している。前者については、幡豆町で採れる「幡豆石」が名古屋城天守台の石垣に使われたこともあり、昨年十月に名古屋・栄のオアシス21で開催された「名古屋城本丸御殿 秋のPRイベント」に、「石の交流」をテーマとして幡豆町が参加した。後者については、生物多様性の環境を有する海岸沿いの環境を活かし、県内各地で行われる「愛知県生物多様性キャラバンセミナー」の先陣を切って、昨年十一月二十九日に幡豆町で開催された。



幡豆町の民話の舞台ともなっている中之郷古墳(幡豆町西幡豆地区)を名古屋大学の大学院生達が調査している様子。

幡豆らしさを感じさせる景観要素の発掘

地域ブランド活性化計画のもう一つの柱である「景観」については、北に続く三ヶ根山、愛宕山、見影山(弘法山)などの山々の尾根と、南に広がる三河湾に囲まれた閉鎖的な空間が、変化に富んだ様々な景観をつくり出している。名鉄蒲郡線沿線の市街地、海辺の集落、山間の集落など、それぞれの景観があり、建物の高さが低く抑えられていることで遠くまで見通すことができる。また、昔ながらの木造の家や幡豆石の石垣の上に建つ建物などは、都会の人から見れば癒しの空間になる。しかし、市街地や集落を細かく歩いてみると、空家や空地、都会で見られる欧米風のデザインの家が増えてきており、昔ながらの地元の建材を使った木造住宅が少なくなってきた。

このような課題もあって、幡豆町からの働きかけで、名古屋大学大学院村山准教授とタイアップによる現地調査が二回実施された。一回目は二〇〇七年六月に学部生の基礎セミナーとして、二回目は二〇〇八年十月に都市環境学の大学院生の現地実習として行われた。一回目は、東幡豆地区、西幡豆地区、山間の集落と広範に見学を行い、二回目は名鉄蒲郡線西幡豆駅周辺に絞り込んで調査を行った。特に二回目の現地実習では、約七十名の非常に数多くの興味深いコメントが出

れており、それらの中から一部を紹介する。いずれも、幡豆町の人々から見れば日常のなんでもない景観であるが、都会から来る学生にとっては非日常の魅力的な景観として捉えられている。

◇自然に囲まれた家
見影山を背景に非常に絵になる。

◇地元の石垣
すぐそばの小野ヶ谷川でとれた川石をつかった石垣。

◇天然素材で家を作る
木の枠組みと土壁。昔は天然素材で家を作っていた。

◇漁業グッズも再利用
製網業もやっている幡豆。かつて盛んだった海苔産業で使っていたネットを再利用。幡豆の人はエコ人間!

◇見影山のすその小学校
地域のランドマークとしてだけではなく、歴史や文化とも関係のある見影山のすそで季節の変化を感じながら勉強することができる。

◇ワンマン電車
路地を行くと(名鉄蒲郡線の)踏切があり、サツと赤い電車が走る。この近さが新鮮である。

景観によるブランディングに向けて

二〇〇七年十二月には、各地区の景観的な資源について町内に約三十もある集落(組)の代表の方々に対象に、地域ブランドに関するヒアリング調査が行われた。この結果、各組には必ずといっていいほど、神社やお寺が存在し、これらがコミュニティの場として愛されており、また、多くの組で太鼓のまつりが今も行われていることが確認された。

二〇〇八年十一月には、業界団体、商業事業者、工業事業者、金融などの関係者など約四十団体(町外五団体含む)に対してヒアリング調査が行われた。この調査では「景観」「特産品」「イベント」の三つの柱について、優先順位をつけるのと、三位を「景観」と回答した人がほぼ六割に

達している。「特産品」や「イベント」と比べて順位を低く回答した人が多かったのは、「景観」の取り組みは時間がかかり、活性化への特効薬にならないことが理由だと考えられる。一方、「三つの柱のどれも重要」というコメントが多くなる人から出ており、これらの順位をつけることが難しく、幡豆町の「景観」の良さは地元の人々も認識していることが確認できた。このように、幡豆は都会にはない「景観」が魅力的だと、地元の人々も訪れた学生も理解している。しかし、個別の建物を見ると、都会のものや変わらないデザインで建物が建てられている。人々の価値観の多様化に伴い、今後このような建物デザインの「都市化」が進行していくことが予想される。しかし、地元では今まで景観に対する議論があまり行われてこなかったため、すぐに景観計画や景観条例のような制度を適用することは難しい。まずは、上記のような学生による調査結果を活かしてガイドブックとしてまとめるなど、地元への普及啓発から始めていく必要があるだろう。



島まで歩いて渡れる干潟。干潟を臨む東幡豆漁業協同組合にて、昨年11月に第1回愛知県生物多様性キャラバンセミナーが開催された。



屋根がリスミカルに続き三河湾を眺める市街地の景観(左)も、室町時代に京から逃れてきた女官小野小桜(おののこざくら)の屋敷跡を今に語り継ぐ集落の景観(右)も、いずれも幡豆町の景観。